時空異端なれども(遙か３)

時文れいや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
時空異端なれども（遙か３）

【Ｎコード】
Ｎ３３９４Ｑ

【作者名】
時文れいや

【あらすじ】
青龍、玄武、泰衡女体化。
メインＣＰ・・・弁九
サブＣＰ・・・知将、ヒノ敦、譲朔
前提ＣＰ・・・九↑望
望美は何度か時間跳躍済み

不時着

何度目かの時空跳躍。
毎回のように何事もなく、念じた時空へ跳べるのだと何の疑問もなく望美は思っていた。
ところが、いつもと様子が違う。
時空の渦、と言ってよいのかどうかわからないが、それが激しい。
望美は流れに飲み込まれまい、と踏ん張ったが、それもむなしく巻き込まれていった。
望美が飛ばされた時間は冬の宇治川‐望美が初めて飛ばされた時空‐だった。
今までと何の違いもなく、彼女たちは源氏軍の拠点、橋姫神社へ向かった。
少し前まで望美がいた時空と多大な違いがあることを知らずに。
橋姫神社に着いたとき、望美は目を見張った。
目の前にいるのは確かに九郎と弁慶だ。
しかし、記憶にある九郎とは違う。
なぜなら、九郎が男ではなく女であったからだ。
驚いている望美を見て、九郎はいぶかしげな目を向けた。
「で、お前は何故人の顔を見て驚いているんだ？」
その一言ではっとした望美は話の前後が全く読めず、素直に
「えっと・・・・まさか女の人だとは思わなくて・・・・」
と言ってしまった。
それに九郎は眉根を寄せた。
「将が女だと不服か？お前は剣を携えているが・・・木曾の女兵ではないな」
「そういう意味で言ったわけじゃありません。私は春日望美。白龍の神子です」
望美がそう告げると、朔と白龍が賛同し、御伽噺じゃないのか、と

疑う九郎を納得させた。
その後は望美が体験していたことと寸分も違わずに話が進んでいった。
望美は九郎たちについて宇治上神社へ行き、惟盛を倒し、勾玉を手に入れた。
そして、元の時空に戻れば良いと思っていたのだ。

否定

望美は混乱しながらも、その中で一番良いと思える行動をとった。
そうすれば、春になる前に時空跳躍をすればよい、となんとなくこれまでの経験で感じていた。
宇治川での戦いで積極的に怨霊に向かっていき、九郎たちの支援をし、勝利への手助けをした。
あらかたの戦いは落ち着いた。
この時ならば、と望美は逆鱗を構え・・・・・。
逆鱗を構えたのだが、跳躍ができなかった。
元の時空へ戻るための手立てをなくし、望美はうなだれ途方にくれた。
今まで一度も逆鱗が無事な状態で跳べなかったことなんてなかったのに、と望美は思った。
仕方がないと望美は自分に言い聞かせた。
きっと、高望みばかりしていたからだと。
一人でいた望美を心配したのか、朔が声をかけた。
その声に促され、みんなの所へ行った。
そこには、譲、白龍、弁慶、景時、そして九郎がいた。
望美からすれば九郎だけが異質だというのに、望美を除いた全ての人がそれが当然であるように振舞っている。
それが普通なのだが、望美には受け入れ難かった。
九郎が女だなんて信じたくなく、望美は九郎に抱きついた。
そして、彼女は九郎が確実に女性だということを思い知った。
望美が知っている九郎ならば、抱きつきでもしたものなら真っ赤になって固まる。
しかし、九郎は一瞬驚きはしたものの、適当にあしらった。
なおかつ望美は九郎が女である実感を得てしまった。
不意に涙がこみ上げてきて、そのまま、九郎に泣きついた。

九郎は戸惑いながらも望美をそっと慰めた。
それにまた望美は涙をこぼした。

変わらないこと

望美にとって、何度目かわからない春の装いを見せる京。ここはいくら時空を遡っても、ずれても変わらずにいた。それがいっそう違いを浮き彫りにさせているような気がした。
あの時と同じように九郎が望美の実力を問う。だけどその声は以前の時空とは高く異なっていた。だから望美は違和感を感じて気がそれて、花断ちが上手くできなかったと言うのはあまりにもお粗末であった。それを見た九郎は顔を渋らせた。おそらく、望美の力を、一方的に突っぱねることをできないくらいにはあるが、しかし一言で認めるには及ばないものだろうと判断したからであろう。そして彼女は二万日猶予を置いてから検討するといった。
一行が梶原邸に戻ってから、望美はありえない失態に落ち込み、ふらふらと人気のない庭に出て行った。そぞろに剣を構え、素振りをする。そうすれば気分を落ち着かせられると思った。すると、望美は急に背後から声をかけられた。
「この馬鹿、上の空で剣を扱うんじゃない！！」
「あ……」
望美は思わず手を止めた。とたんにどっと疲れが押し寄せる。かなり無茶苦茶なふり方をしていたらしい。望美が自身の様子に気がついて目を泳がせ他のことに九郎はため息を付いた。あまりの自覚のなさに自然と注意だ厳しくなってしまう。ついつい言い過ぎてしまったと九郎は思い、望美を見ると、望美は今にも泣き出しそうなのを懸命に顔をしかめてこらえていた。
「そんな言い方内じゃないですか？……もう、いや！」
「待て、望美！」
その場から駆け出していく望美の腕を九郎がつかんで引き止める。
「別にお前を怒鳴りたくてきたんじゃない。ただ、今日は普段と様子が違うように見えたから気になっただけだ。それで見にきてみれ

ば……」
九郎はそこで口をつぐんだ。そして不意に目をそらした。気まずくなって望美が思わず謝まった。それに九郎は何か言いたげにしていたが、
「いや、別にいい」
とだけぽつりと言った。お互いにいたたまれなくなって、二人は中へと入っていった。

出会い、五条

無味乾燥な日々に嫌気が差して、血の気が多い僧たちを集め徒党を組んだ。
夜な夜な武士に襲い掛かって金目のものを盗ったり、他の党と争ったりして暴れていた。
あるとき、ある噂を聞いた。
その噂とは、
―男とも女ともわからない子供が剣の相手を探しに夜道をうろついている。その子供は子供とは思えないほど強く、負けたことがないらしい。そして、その子供は負かした者たちを集め党を作っている。―
というものだ。
まるで現実味がなく、ただの根も葉もない噂話だと、気にも留めなかった。
その噂を耳に入れて、しばらくが過ぎた。
その頃、たまたま仲間を早く引きかえらせ、一人で夜の京を歩いていた。
なんてことはない。
たぶんもう、徒党を組んで暴れることにも飽きてきたのだろう。
なんて、自分のことながら笑えるほどに客観的に分析していた。
そんなことを考えて足を進めていると、不意に呼び止められた。
「・・・そこのお前。俺と手合わせをする気はないか」
振り返るとそこには太刀を携えた中性的な子供がいた。
まさか、あの噂が本当だったとは。
厄介なことになったとは思いつつも、さして断る理由もなく。
その上、自分の腕にも自信があった。
「別に構いませんよ」
―あの噂がどこまで本当なのか試して見ましょうか―

すると、その子は打ちかかってきた。
それを薙刀で受け流す。
なかなか腕前は良いようだが、それでもまだ腕前は未熟である。
自分には及ばない。
何合か打ち合う。
相手は次第にこちらの攻撃を受け止めきれなくなってきた。
薙刀の軌道に入らないようにひら、ひらりと避け始めた。
やがて、その避ける動作さえもぎこちないものへと変わっていく。
・・・・・・もらった、と思った。
しかし、乱れた動きだったものが再び鋭いものへと戻る。
その変化に一瞬対処できずに体勢を崩してしまった。
その隙を逃がすまいと、太刀の一閃。
それを何とか薙刀で受け止め――――。
ギィンという金属同士がぶつかる耳障りな音が響く。
ビィンと手に衝撃が伝わる。
その衝撃によって、薙刀の柄には折れてしまうのではと思うほど大きな傷ができていた。
そして、相手の太刀は勢いを抑え切れなかったのか持ち主の手を離れ、地に落ちていた。
「・・・得物が駄目になってしまいましたね。どうします？まだ、やりますか？」
そう問えば、相手は
「いや、止めておく。あのままやっていたとしても決着はつかなかっただろうからな」
と言った。
確実に勝利することが難しいとなったらあっさり引くとは・・・。
普通の成り上がりならば、まず、機を読まずにバカの一つ覚えで突っ込んでくるというのに。
なかなか賢いようですね。
そんなことを考察していた。

「おい、お前。腕が立つな。名はなんと言う？」
「僕は武蔵坊弁慶と言います。君は？」
「俺は遮那王と言う。お前が比叡の徒党の中心核なのか？」
「ええ、そうですよ。僕がそうだと知っているとは、君ももしや・・・」
「ああ、俺は鞍馬で徒党を組んでいる」
と、いうことはあの噂は本当だったということですね。
僕としたことがただの噂として実際のものを気にかけなかっただなんて。
とんだ思い込みをしてしまっていたものだ。
もし気づかずに衝突していたら・・・と彼の実力ならもしかしたらと、ぞっとする。
ここで手合わせできたのは幸運としかいいようがないだろう。
その上、彼は
「数ある徒党の中で強いとされる比叡の徒党か・・・できれば党同士でやりあってみたいものだな」
と続けた。
その後、太刀を拾い、去っていってしまった。
なんて子供なんだろう。
子供らしい勝手さと、ともすれば、冷静な武士としての側面を思わせる。
面白い。
何故だか、彼が言ったとおり党同士でぶつかり合うような気がした。
さて、まずは敵を知らなくては。
新たな目的ができた僕は意気揚々としてその場を後にした。

対策

それからいろいろあって、今では共に京を騒がし回るようになった。そんな折、京から源氏を追い出されるという話を小耳に挟んだ。対象になっている九郎にこのことを伝えると、あっけらかんと、そうらしい。と言われてしまった。ここを追い出されたらどこか当てはあるんですか、と聞くと、ない。とこれまたきっぱりと言われてしまった。全然焦った様子ではない九郎を見て、思わず溜め息がこぼれた。まったく、君はこれからどうするつもりなんでしょうか。

「そんな調子でどうするんですか。今はまだ噂ですけれど、現実になってからでは遅いんですよ」

「ああ、それはわかっている。だからどうしようかと思っていたんだが…」

九郎はそこで言葉を濁らせた。どう説明しようかと思案げな顔になったので、続きを促す。

「それで？」

「兄上たちを頼ろうかと思ったんだが、よく考えてみると兄上たちも私と同じだ。だから、それは無理だ。そうなると私には」

「打つ手はない、と言うことですか」

「ああ」

先ほどの口ぶりでは何も考えてはおらず、それでないのかと思っていたが、そうではなく、彼女が考えて出した結論であることに頭を抱えたくなった。

まさに八方塞。唯一の救いはまだ猶予があるということだ。だが、その猶予もあとどれだけ残っているのかはわからない。なんとしてでも彼女の身の寄せ場所を探さなくては。その手段を頭に巡らせ、思いついたのは己の身内を使うことだった。

それはいつかの話

かつて戦があったことを忘れさせてしまうかのような平穏な日々。
世の中を見渡せば、戦の傷跡の面影がちらほらと残っているが、そこには確かな平和があって。
変わってしまったなぁ。と考えると、浮かぶのはあの異世界から来たあの人たちのことで。
世と反していまだに凄惨なあの時、あの場所のことが生々しく忘れられないのと同じように、あっという間に過ぎ去ってしまった彼女たちをまだしっかりと思い出せることに笑みがこぼれた。
すると、その笑みに気づいたのか九郎がなんだ？と声をかけてくる。
それに望美さんたちのことを思い出していたんですよ、と答える。
彼女は家事をする手を止めずに、そうか、と言って。
僕は、まるであの人たちは風のようだったですね、と言うと、ああ、と返事が返ってくる。
それから思い出したことをぽろぽろとこぼしているうちに、返ってくる答えは明らかな生返事に。
生返事でも何でも返してくれる九郎と共にいることができるなんて、あの時は考えもしなかった。
だから、この幸せで満足すべきなのだ、と言い聞かせても人というものは貪欲で。注意を引きたくなった。
だから、ね、知ってました？望美さんはあなたのことを恋焦がれていたんですよ。と言った。
九郎は生返事を返した後で盛大にはあ！？と驚いた声を上げた。
そんなことあるわけないだろう！と手を止めて僕のほうに目線を向ける。
気が引けたことがうれしくてまた笑みをこぼし、あるわけがなかったんでしょうか、とあいまいに言う。
弁慶、はっきりと言ったらどうだ、と問い詰められる。

言えるわけないでしょう、それは確かなんですから。ああ、でも君が気づかないままでよかった。と心の中で言い、先にいる九郎の姿に目を細めた。
九郎のその先にある家事は明らかにあの戦が始まる前よりも増えていて、それはそういうことだ。
君に恋した少女のおかげで僕は幸せを享受できて、それを知らない君はつまり僕がずるいことを知らない。
つまりは全てに感謝を！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3394q/

時空異端なれども(遙か３)

2011年1月26日01時57分発行